

目 次

序 文 (パラマハンサ・ヨガナンダ)	v
SRF出版部記	viii
序 章	1
第1章 福音 (基本的概念)	20
第2章 目標	50
第3章 手順	61
第4章 実現	103
結 び	114

序 章

चतुर्नवत्युत्तर शतवर्षे गते द्वापरस्य प्रयागक्षेत्रे ।
सदर्शनविज्ञानमन्वयार्थं परमगुरुराजस्याज्ञान्तु प्राप्य ॥
कङ्गारवंश्यप्रियनाथस्वामिकादम्बिनीक्षेत्रनाथात्मजेन ।
हिताय विश्वस्य विदग्धतुष्टये प्रणीतं दर्शनं कैवल्यमेतत् ॥

「このカイヴァリヤ・ダルシャナム（‘究極の真理’の解説）は、カラール家のクシェトラナートとカダムビニの子、プリヤ・ナート・スワミによって書かれたものである。

この解説書は、筆者が、現ドウパラ期^{ユガ}194年の終りに近いころ、アラハバードにおいて、偉大な師よりその意を受け、世の人々に贈るものである」

あらゆる宗教の間には、本質的一致点があり、種々の信仰が説く真理も、帰するところは一つである。また、世界は、外的世界も内的世界も、整然たる一つの方式によって展開されており、そこには、あらゆる聖典が認めているただ一つの目標がある。本書の目的は、これらの事をできるかぎり明らかにすることであるが、この基本的真理を会得することは必ずしも容易なことではない。各宗教間の抗争や、人間的無知のために、一般の人々にとって、ヴェールの背後にある森厳な真

理をのぞき見ることは、ほとんど不可能にも近いありさまである。それぞれの教義は、対立や紛争の精神をはぐくみ、靈的無知が教義間の溝を広げている。各宗派が主張する教義の別を超越して、あらゆる偉大な信仰が説く真理の間に共通する絶対的一致点を見いだす者は、特に恵まれたごく少数の者のみである。

本書の目的は、種々の宗教の根底に横たわる一致点を指摘し、相互の融和をはかることである。これはまさに至難のわざであるが、私はこの使命を、アラハバードで聖なるおかたから授けられた。アラハバードは、ガンジス河と、ジャムナ河と、サラスワティ河の合流点に位置し、プラヤーガ・ティールタ（聖なる交流の場所）と呼ばれ、クンバメラの催される場所である。そのときここでは、一般世間の人々と、靈的悟りを求める人々との集會が開かれる。ふだんは、世間の人々は日常生活の束縛から脱け出すことができないし、一方、いったん世俗的生活を捨てた行者たちは、めったに混乱した俗世間の中には降りて来ない。しかし、世間的雑事に追われている人たちも、明らかに、人類に光明をもたらす聖者たちの助けと導きを必要としているのである。そこで、こうした二種類の人々がいっしょに出会うことのできる場が必要となる。ティールタは、このような場を提供している。そこは、世俗の岸辺に

序 章

位置していても、浮世の波風を寄せ付けない。人類のための福音を携えた行者たちは、クンバメラを、そうした助けを求める人々にその福音を分かち与えるための理想的な場と考えているのである。

私が、そのような福音を広く人々に伝えるために選ばれたのは、1894年1月、アラハバードで開かれたクンバメラを訪れたときのことであった。ガンジス河の堤を歩いていたとき、私は見知らぬ男に呼び止められ、一人の偉大な聖者に引き合わされた。この聖者こそ、私の師であるベナレスのラヒリ・マハサヤの師、ババジであった。私のパラムグル（師の師）であるこの偉大な大師にお目にかかったのは、このときが初めてであった。

ババジとの会話の中で、私は、このような聖なる集会の場にいつも集まって来る、ある種のふさわしからぬ人々のことに言及した。そして、このような人たちよりも、遠いヨーロッパやアメリカの国々で異教を信じ、クンバメラの意義も、また存在も知らない人々の中に、かえって、理性的にもはるかにすぐれ、霊の先達や真剣な求道者たちとの交わりをもつにふさわしい人たちが居ることを指摘した。私はまた、彼らが知能の点ではすぐれていても、残念なことに、現代の蔓延した唯物思想に毒されており、科学や哲学等の分野で

りっぱな学識を有する人でさえも、宗教原理の根本的一致については理解がなく、こうした未熟な宗教的信条が、むしろ人類を互いに離反させる頑固な障壁になっていることを申し上げた。

ババジはほほえみながら、私にスワミの称号を授けてくださると、本書を書くよう指示された。なぜ私が選ばれたのか、それは私の知るところではないが、その障壁を取除いて、あらゆる宗教の根底に横たわる共通の真理を明示するという大役を、私は課されたのである。

本書は、理解進展の程度を四つの段階に分け、これに応じて四つの章に分けてある。宗教の最高目標は、‘^{アートルマ・ギヤナム}真の自己を知ること’であるが、この内なるものを知るには、まず外の世界について知る必要がある。そこで、第1章では、基本的概念（聖なる知識、福音）として、宇宙創造活動の根本原理を説明し、現象世界の展開と複雑化について述べた。

宇宙のあらゆる被造物は、連鎖的創造活動の中の最高のものから最低のものに至るまで、存在、意識、至福という三つのものの実現を切望していると観られる。これらの目的または目標が第2章の主題である。第3章には、それら三つの目的を実現するための手順

序 章

について述べた。そして第4章においては、その手順を実行してしだいに目標に近づくにつれて内的に開けてくる境地について述べた。

説明の方法としては、まず東洋の聖哲たちが説いた主題をサンスクリットで掲げ、次にそれを、西洋の聖典を参照しながら説明した。このようにして私は、東西両洋の教えの間に、本質的には何ら矛盾のないことを示すよう努めた。本書は今、人類の知識があらゆる分野で急速に発達するドワパラ^{ユガ}期を迎えるにあたって、私のパラムグル、ババジの霊的指導のもとに書かれたものであって、ここに、本書のもつ重大な意義が、本書の目的とする人々に、十分にくみ取られることを願うものである。

さて、天体の周期に基づく‘ユガ’（期、宇宙的季節）に関する数学的計算によれば、この世界は現在、ドワパラ^{ユガ}期にはいっており、今年（西暦1894年）で194年を経過した。そして、この時期^{ユガ}の影響を受けて、人類の知識は急速に発達しつつある。

われわれの太陽系において、衛星は惑星のまわりを公転し、惑星はそれらの衛星を従えて自転しながら太陽のまわりを公転しているが、東洋の天文学によれば、太陽にはまた、対^{ついで}の関係にある星があつて、太陽はそ